

バラエティ番組における田嶋陽子のフェミニズム実践と社会的背景 —田嶋本人、制作者・共演者への聴き取り調査から Feminist Practices of Yoko Tajima on Variety TV and the Social Background: Through Interviews of Tajima, Her Co-Stars and the Producers

齊藤 正美
Masami SAITO

富山大学 Toyama University

要旨…本報告は、約30年にわたりTVバラエティに出演し、フェミニズムの立場から発言を続け、女性学やフェミニズムを可視化する役割を果たしてきた女性学者田嶋陽子に焦点をあてる。その目的は、田嶋が主に90年代に出演した「TVタックル」及び、2000年代以降に出演している「そこまで言ったら委員会」の両番組で田嶋にどのような役割が付与され、それに社会的背景がどう影響していたかについて、両番組の制作者、共演者への聴き取り調査などから明らかにすることである。フェミニズムに勢いがあつた90年代は、「良き母」「良き妻」といった従来のジェンダー表象を覆す、結婚生活・「主婦」などに関する田嶋のフェミニズム語りが人気を博した。保守化が進む2000年代以降も、フェミニズムの主張を時代の事象に即して語る田嶋だが、討論番組を盛り上げるバトルに必要な存在だと語る共演者もいる。制作者が出演者に求める役割は、社会の変容とそれに伴う番組の構成なども絡み、変化している。フェミニストの長期にわたるTV出演というメディア支配をかい潜ったかのような事例の検討を通し、TV文化とフェミニズムのポリティックスについて考える。

キーワード バラエティ番組 フェミニズム 田嶋陽子 セレブリティ研究

1. はじめに

田嶋陽子は、1990年代から現在まで、TVバラエティを中心にフェミニズムの立場から発言を続けている。その発言は好悪や賛否両論があるものの、「日本でもっともテレビ向きのフェミニスト」（島崎 1992）や、「フェミニズムの知名度を上げた」（村瀬 1999）と称される。主にテレビを通じて、女性学やフェミニズムを可視化する役割を果たしてきた人物と言えよう。田嶋は、1991年に「ビートたけしのTVタックル（以下「TVタックル」と略記）」に起用され、2003年に「たかじんのそこまで言ったら委員会」（やしきたかじんの死去後「そこまで言ったら委員会NP」に変更。以下「そこまで言ったら委員会」と略記）に起用された。いずれの番組も人気芸人を冠とする民放人気バラエティ番組という点で共通する。

1970年代のウーマンリブ運動以来、フェミニズム運動はマスメディアが女性の活動をからかい、周縁化するとして批判を行いつつ、マスメディアを自らの活動を取り上げる媒体として利用もしてきた。また女性とメディア研究では、報道・ジャーナリズム、ドラマなどを中心に、主に女性がマスメディアにどのように表現されてきたかについての研究を積み上げて来た。

これほど長くTVバラエティに出演してきた田嶋だが、女性学周辺では田嶋とTVに対する関心は低調であった。しかし、TVで「フェミニズムという看板を一身に背負い」、「フェミニズムの知名度を上げた」（村瀬 1999）という積極的な評価も生まれている。

近年は、メディア・ジャンル毎であった研究枠組みを問い直し、「文化装置」「有名性」（Marshall 1997, 石田 1998）、「メディア文化」（田中 2012）など新たな角度から文化の権力性を探求する潮流が生まれている。映画スターのイメージやその多義的なイデオロギーに関する研究も盛んである（Dyer 1998, 北村 2017）。セレブリティ（有名人）研究が盛んになる中、田嶋についても、「『女性』の社会的・政治的立場を代表/代弁する」（田中 2010, 石田 2010）、「憎まれ役」（石田 2010）など田嶋のエイジェンシーに着目する研究が出ている。セレブリティ研究の方法論については、従来言説分析が主であったが（Turner

2010)、近年、内側からの探求という点から有名人本人や関係者へのインタビューを含めたエスノグラフィー研究の有用性が提示されるようになってきている(Driessens 2014)。

一方、日本のTVでかなりのウエイトを占めているTVバラエティ番組については、研究が蓄積されている。まず、バラエティの定義については「楽しみながらみられるもの」、「基本的にスタジオで、タレントや知名人が進行させ、他にも複数のタレントが参加」、「異なるコーナーが存在するもの」であり「個別のジャンルを確立した番組の中に分類できない」ものと規定されている。さらにバラエティ番組が高い視聴率を生むのは「おもしろさを追求したり、わかりやすく作る」など「人々の日常感覚や視聴態様に寄り添ってきた」ためとされる(友宗・原・重森 2001:12-41)。また、近年のバラエティでは、内容より形式が重視され(友宗・原・重森 2001、水島 2002)、「タレント」や「キャラ」の存在が重要になっている(原・米倉 2004)という指摘も出ている。

日本のセレブリティ研究、特にインタビューを活用した近年の成果には、TVの人気者だった上岡龍太郎の話芸における、テレビ、ラジオの話術、漫談などの特質を論じた戸田(2013)や、絶賛とバッシングという落差を経験してきた男性アイドル田原俊彦の人気と時代を論じた岡野(2018)がある。上岡はTV番組のフリートークや生番組の司会などに特に才を発揮した人気タレントであったが、芸そのものが記録もされず、正当に評価もされていないという。テレビ番組アーカイブの不存在、テレビなどいわゆる「伝統芸」以外での活躍をどう評価すべきかは、本報告における田嶋研究においても共通の課題である。

こうしたメディア文化や有名性研究の流れに位置づけられる本報告において、TVバラエティと田嶋を取り上げる研究目的は、それぞれの番組で田嶋にはどのような役割が付与され、それにフェミニズムなどの社会的背景がどう影響していたか、を明らかにすることにある。バラエティ番組における田嶋のフェミニズム語り(実践)は、主流文化を体現すると言われるテレビやその制作者とどのような関係によって成立したのかを問うことにもなる。そして田嶋自身は、主流文化を伝達するといわれるTVという媒体に、どのような思いで出演し続けているのか、についても明らかにしたい。

2. 研究の対象と方法

本報告が対象とするのは、田嶋が主に90年代に出演した「TVタックル」ならびに2000年代以降出演している「そこまで言って委員会」という時代背景の異なる2つの番組における田嶋のフェミニズム語りとその社会的背景である³。番組アーカイブが存在せず、番組の内容分析を行うのは難しい。そのため、田嶋本人をはじめ、それぞれの番組のテレビ局ならびに番組制作会社のプロデューサーやディレクターならびに、両番組の制作者、共演者への聴き取り調査を積み重ね、それに収録見学といったエスノグラフィー的手法を加味し、多角的、統合的な観点からの分析を行った。

「TVタックル」は、1989年7月にテレビ朝日系列で放送開始、現在まで30年近く放送が続く長寿番組。視聴層としては、都会の若者ではなく、地方の中高齢層をターゲットとしている。当初は情報バラエティ色が強い番組だったが、のち、小泉政権時代に政治テーマを打ち出し討論バラエティ的な番組に転換し、視聴率が上がった。田嶋は、「TVタックル」には1991年1月から出演をはじめ、2001年、参院議員選挙に出馬するまで、頻繁に出演した。田嶋は現在も時折出演するが、田嶋が頻繁に出演したのは情報バラエティ色が強かった時代であった。田嶋は舛添要一、嵐山光三郎などの男性出演者らと番組内で論戦を展開した。同番組は、田嶋自身をはじめ、舛添要一など学者のタレント化と政界進出の流れを作った番組の一つでもある。

一方、2003年に始まる在阪の読売テレビ「そこまで言って委員会」は、政治や社会問題から文化、芸能までを扱う討論形式のバラエティ番組。大阪の読売テレビ系列で、関東広域圏などを除く全国の地方局で日曜日に放映され、高視聴率をキープする。視聴者層は中高年齢層でコアなファンが多いという。報道番組ではなくバラエティ番組という位置づけ。収録会場には観覧者も加わる。田嶋は初期から出演し、現在は準レギュラー(月2回)。現在は辛坊治郎、渡辺真理の司会。出演者は政治家や文化人、評論家、タレントなど8人。長谷川幸洋、竹田恒泰、井上和彦など右派言論人が多く、かつては橋下徹もよく出演し、安倍晋三総理もしばしば出演する。

聴き取り対象については、田嶋本人については2011年以来現在まで、年に1度以上、随時会って話を聞くほか、さまざまなイベントへの参加を通して継続して話を聞いている。番組関係者(テレビ局、番組製作会社含む)に関しては、「TVタックル」では番組制作者3名、共演者3名、「そこまで言って委員会」では番組制作者4名、共演者5名にインタビューしている。収録見学については、「TVタックル」、「そこまで言って委員会」それぞれ複数回、行ってきた。

なお、テレビのバラエティ番組に出演してきた田嶋陽子とフェミニズムの関係をとりあげる本研究は、モンタナ州立大学の山口智美准教授(文化人類学)とのテレビ、教育、シャンソン、書アート活動を含めた田嶋陽子の全人的な文化活動をテーマとした共同研究の一部である。本報告に関しては、共同研究者からインタビュー情報等の資料提供を受けてはいるものの、本報告の内容ならびに分析については、斉藤単独で行っている。

3. 「TVタックル」と「そこまで言って委員会」における田嶋陽子の役割の変化と社会的背景

(1) 番組における田嶋の役割：「TVタックル」と「そこまで言って委員会」

90年代「TVタックル」の田嶋は、「パンツ論争」や「専業主婦論争」などとフェミニズム思想を人口に膾炙することに貢献し、彼女自身も広く知られるようになった。田嶋自身、「私の二十世紀最後の十年間は、ビートたけしさんの「TVタックル」（テレビ朝日系）に始まり、「TVタックル」に終わった感じがする」と記す。当時の番組制作者によれば、メディア制作の現場が男性中心の考えや体制であったため、田嶋が政治や文化、事件など全てフェミニズムに結びつけて語ることが新鮮に思えた、女性視聴者からの反応もよかったと語る。フェミニズムがテーマになり、田嶋と舛添要一のバトルが番組の看板の一つという時代もあったと番組制作者も述懐する（山本2010:30）。即興の笑いを生み出すバラエティ番組に大事なものは「人＝キャラクター」（井上1999）と言われる。番組制作者が田嶋に見る「キャラ」は、わかりやすいコミュニケーション、嘘がない、テレビ向きなどである。田嶋が人の話を聞かないように見えることがバラエティ的には面白く、その「キャラ」をテレビ側が消費したと反省的に語る制作者もいた。

一方、2003年に始まる「そこまで言って委員会」では「慰安婦」問題は、制作者や共演者にとって番組の「真骨頂」（番組制作者の一人）というほど重要であったため、田嶋による「慰安婦問題は女性の人権問題」などのフェミニズム語りは継続している。その一方、田嶋の立ち位置は、共演者の一人によれば「1対7で、全員敵に回して議論する」というものであり、「まわり敵ばかりという臨戦態勢でのぞんでおられる」という厳しいものになっている。別の共演者は、「僕はテレビ屋ですからテレビとしておもしろいかおもしろくないか、"That's all"なんです。抜群に面白かったですねえ。田嶋さんがいるときといないときとでは番組のテンションがまったく違う。田嶋さんが一人いらっしやるだけで、あの対立軸がうまれる」と語る。ある制作者は、田嶋を「テレビがわかっている。数少ないテレビ向きの女性論客」と語る。また多数を相手に臆せず語る田嶋は、この番組をよしとしない人の代表格であり、耳を傾けておかななくてはならない存在という意味で、「替わりのない存在」と語る制作者もいた。

（2）田嶋の役割の変化と社会的背景

1990年代は、女性運動が男女別出席簿やセクハラ問題などを世に問い、女性学やジェンダー研究が勢いをつけ、国や自治体が女性問題に取り組む姿勢を見せるなどフェミニズムに勢いがあった。そうした中、田嶋の語りが人気を博した。女性共演者の一人は、田嶋が「本当にこれを言いたいと思って一生懸命勉強してきて張り切って言ってるのに、男たちはというか、TVに出る人っていうのは別に番組を面白くするために言葉尻を捉えて、揚げ足をとったりとか、正論を言わせないというか、コロコロって転がすでしょ。それをいつも歯ぎしりして悔しがって」いた姿を思い出すという。だが、「田嶋先生が日本の社会に与えた役割って大きいと思いますね。テレビを通じて、ちょっとその道化みたいな感じでできていたけれども、少しずつやっぱり浸透は、っていうかみんなに問いは投げかけてるんじゃないでしょうかね」と田嶋の貢献を語っている。

1990年代に田嶋が刊行した書籍の読者カードには、「TVタックルでたけしをやっつけられる唯一の人として非常に興味のある方です」（『愛という名の支配』）、「田嶋先生のファンです。センセイのおっしゃることは、私たち女性にとって大変心強く、勇気が持てます。先生のように強い女になりたいです」（『もう、「女」はやってられない』）などとTV発言への肯定的な反響が書き込まれている。田嶋がTVを通して語るフェミニズムを熱狂的に受け止めた人たちが確実にいたと言えよう。

一方、社会の急速な保守化が進む2000年代、保守言論人が多く出演する番組の田嶋は、時宜に応じたフェミニズムの語りも依然として続けているものの、番組制作者からは、テレビをわかっており、どんな場面でも少数派の声を臆せず語る、耳を傾けるべき人物として必要とされている。バトルで番組をおもしろくする存在とも指摘される。田嶋の番組における役割は番組の構成や趣旨などに即し確実に変化を見せているが、それには2000年代以降のフェミニズムの凋落（山口・斉藤・荻上2012）及び、右派言論人が多数出演する番組が全国の地域で高い視聴率をキープするなどの保守的な社会状況も影響している。

（3）テレビ出演を続ける田嶋の思い

田嶋は、最初にバラエティに出演した時のことを、「「笑っていいとも」は見たことがなかったが、これまで研究してきた女性差別のことが少しでも話せるならと、ごく軽い気持ちでOKした。あとになっておかゆしか喉を通らなくなるほど苦しむなどとは夢にも思わなかった」（田嶋1993:347）と振り返る。そして田嶋は、60年安保の頃に学生運動にも参加し、「シュプレヒコールやって国会取り巻いたり、そういうことやってた」ものの、団体行動が苦手だと認識したという。そして「たまたま私がテレビに出るようになった時、これは私のたった一人の運動だと思った」と語る。田嶋はバラエティが当時のインテリに「バカにされている」ことを知りつつも、「例えばフェミニズムを3チャンネル(NHK)でやっても誰も聞いてくれない。だけどお笑いでやる、茶化してやれば人は聞いてくれる」と確信していたのだという。田嶋はテレビ出演に際して、法政大学で同僚だった駒尺喜美に相談した。そして駒尺から「『テレビは拡声器』なんだから、批判されようが、半分の人だけでも聞いてくれれば、それは論文書いたり、本書いたり、新聞に書くよりも、みな聞いてくれるんだから、それで議論すればいい」と背中を押されたという。田嶋は、「結局は、それが柱になったんですね」と語る。

「そこまで言って委員会」での田嶋は、これまで何度か番組に出なくなった時期もある。現在の田嶋は、ストレスを感じつつも出演を続けている。制作者との間に厚い信頼関係が生まれているほか、田嶋は次のように語る。「私のように50になってからテレビに出る人間って、タレントでもないし、美人でもないし、そういう人間がテレビに出るってことは、私はこれは自

分の使命っていうか、やっぱり時代の流れに、風に押されて出るんだってと思ってましたから、自分は女性の人権について言っていこうと思いましたね。テレビに出て何言われようと、私は自分がいらないとされるまで出ようと。」

4. おわりに

本報告で明らかになったのは、90年代フェミニズムに勢いがあつた時代の田嶋は、「主婦」やセクハラなどに関するフェミニズム語りが人気を博し、フェミニズムを可視化することに貢献した。保守化が進む2000年代以降は、田嶋の役割について、バトルで番組を面白くする、テレビをわかっている女性論客などが上げられる。田嶋自身は複雑な思いを抱えつつも、拡声器としてのTVや、お笑い番組の伝わりやすさに信を置き、一人でできる運動として出演を続けている。制作者が出演者に求める役割は、社会の変容とそれに伴う番組の方向性や構成などと絡み変化しているが、フェミニスト自身の思いやテレビ適性も長期出演に関係していることがうかがわれた。フェミニストのTV番組への長期出演という田嶋事例の検討からは、メディア文化の流動性、多義性、複雑性が示唆された。メディア文化とフェミニズムの関係について、更なる解明への一歩としたい。

補注

¹田嶋陽子は、1941年生まれ。元法政大学教授、専門は英文学。元参議院議員。現在は「そこまで言って委員会」などのTV出演の他、シャンソンのライブやコンサート、書アートの個展など多彩な活動を行っている。

²島崎今日子「現代の肖像 田嶋陽子—日本で最もテレビ向きのフェミニスト」（「AERA」1992年2月11日号 創刊200号記念）のち、島崎（2001）に再掲。

³田嶋は、1980年代に『NHK 英会話II』に3年出演した。バラエティ番組初出演は、1990年7月19日「森田一義アワー 笑っていいとも！」の「モリタ花婿アカデミー」コーナーであった。本報告では、短期出演に止まった同番組については扱っていない。

⁴田嶋陽子2001「あとがき」『だから女は「男」をあてにしない』講談社。

参考文献

- 石田佐恵子, 1998, 『有名性という文化装置』 勁草書房。
- 石田佐恵子, 2010, 「＜女性文化人＞の構築とその力学」 南後由和・加島卓編『文化人とは何か?』 東京書籍: 148-169。
- 井上宏, 1999, 「バラエティ番組に見る日本人の笑い」 『AURA』 135号: 2-5。
- 岡野誠, 2018, 『田原俊彦論 芸能界アイドル戦記 1979-2018』 青弓社。
- 北村匡平, 2017, 『スター女優の文化社会学—戦後日本が欲望した聖女と魔女』 作品社。
- 島崎今日子, 2001, 『この国で女であること』 教育資料出版会。
- 田嶋陽子, 1992, 『愛という名の支配』 太郎次郎社。
- 田嶋陽子, 1993, 『もう「女」はやってられない』 講談社。
- 田嶋陽子, 2001, 『だから女は「男」をあてにしない』 講談社。
- 田中東子, 2010, 「軽さをめぐる冒険 室井佑月のなものについて」 南後由和・加島卓編『文化人とは何か?』 東京書籍: 78-89。
- 田中東子, 2012, 『メディア文化とジェンダーの政治学—第三波フェミニズムの視点から』 世界思想社。
- 戸田学, 2013, 『上岡龍太郎 話芸一代』 青土社。
- 友宗由美子・原由美子・森重万紀, 2001, 「日常感覚に寄り添うバラエティ番組—番組内容分析による一考察」 『放送研究と調査』 51 (3) : 12-41。
- 原由美子・米倉律, 2004, 「現代のメディア空間とテレビの位置」 『放送メディア研究』 2号: 91-95。
- 水島久光, 2002, 「「情報バラエティ」のダイクシスとアドレス—制作者と視聴者が交錯する言説場の検証」 石田英敬・小森陽一 編『社会の言語態』 東京大学出版会: 89-116。
- 村瀬ひろみ, 1999, 「九〇年代フェミニズムと「私」の問題—田嶋陽子と吉澤夏子の主張をめぐって」 『女性学年報』 20号: 102-118。
- 山口智美・斉藤正美・荻上チキ, 2012, 『社会運動の戸惑い—フェミニズムの「失われた時代」と草の根保守運動』 勁草書房。
- 山本隆司, 2010, 「異色の政治バラエティ 笑いの中で見えてくる真実」 『放送文化』 2010年冬号: 30-33。
- Dyer, Richard, 1998, *Stars, New Edition, with a supplementary chapter and bibliography by Paul McDonald*. London: British Film Institute. (=2006, 浅見克彦訳『映画スターの＜リアリティ＞—拡散する「自己」』 青弓社)
- Marshall, P. David, 1997, *Celebrity and Power: Fame in Contemporary Culture*, Minneapolis, Minn.: University of Minnesota Press. (=2002 石田佐恵子訳『有名人と権力』 勁草書房)
- Turner, Graeme, 2010, “Approaching celebrity studies”, *Celebrity Studies*, 1(1): 11-20.
- Diessens, Olivier, 2014, “Expanding celebrity studies’ research agenda: Theoretical opportunities and methodological challenges in interviewing celebrities,” *Celebrity Studies*, 6(2): 192-205.